

## 新聞読者に拓かれた人情世態小説

坪内逍遙「此処やかしこ」試論

大貫俊彦

### 一 はじめに

明治の草創期に「続き物」と呼ばれた読み物が次第に発展し、新聞小説として現在まで続く長い歴史のなかで、明治二〇（一八八七）年前後の数年間は新聞にとっても、紙面に掲載される作品にとっても大きな変動期だったと言える。

「明治一〇年代後半の新聞界は自由民権運動の衰退とともに弱体化した」「大新聞」を「小新聞」が追い上げる時期であった」と概括されるように、明治一〇年代後半から二〇年代前半は「大新聞」と「小新聞」という、存在意義や購読者層を異にしていた新聞の棲み分けが曖昧になっていく時期にあたる<sup>①</sup>。自由民権運動の退潮により「大新聞」が停滞している間、読者

の好みを取り入れた「小新聞」が躍進し、購読者の獲得に乗り出しはじめる。そこで各紙は紙面改革を謳い、情報の正確さや迅速さ、情報量の増加、平易な論説の掲載に加え、従来人気があった「続き物」やその挿絵を一層充実させる等の方針を打ち出していく。一方「小新聞」に水をあけられた「大新聞」もこの状況を見かねて紙面改革に踏み切る。明治一九年九月、欧米視察から帰国した矢野文雄が他紙に先駆けて『郵便報知新聞』の改革に着手するが、その主な項目は紙面の縮小、価格の引き下げ、文章の平易化とともに「大新聞」が掲載してこなかった文学的な読み物の掲載であった。以後、この成功を受けて『東京日日新聞』をはじめ有力な「大新聞」が続々と同じ方向に舵を切る。その結果、購読者の獲得競争は益々過熱し、新聞の販

売勢激化時代が到来する。

次に創作に関する紙面の動向へ目を転じれば、「大新聞」の紙面改革における大きなトピックとして文学的な読み物の掲載があったことは右に述べた通りである。ただしこれはこの時期の新聞全般に特徴的な事象ではない。かねてから「小新聞」では「続き物」は不可欠の要素となっていたのであり、むしろここでは知識人層に消閑の具と見なされていた読み物を「大新聞」の紙上に掲載せざるを得ないほどに認識が高まっていたことを確認すればよいだろう。

そしてどの新聞にも同じような読み物が掲載されるとなれば、続く現象は各紙がその差別化を図りだすということとは想像に難くない。高木健夫氏が「連載小説が、独立経営期に入った新聞の販売政策からしても、『目玉商品』としての役割を主張しはじめた」と指摘するように、明治二〇年前後の新聞メディアと文学の特徴はここにある<sup>3)</sup>。例えば『やまと新聞』は三遊亭円朝の講談に大蘇芳年の挿絵を添えて人気を博し、先の『郵便報知新聞』では海外事情を読者に伝える性質の翻訳や創作を連日載せ、『都新聞』には芝居の脚本や黒岩涙香の翻訳小説も登場するなど、各紙の読み物が多様化しはじめる。この一連の動きのなかで本稿が注目するのは、多くの新聞が購読者の好みに合わせた啓蒙的なしは娛樂的な特色を見せるなかで、新しい文

学潮流として坪内逍遙に注目し、ごく短期間ではあったがその作品を掲載した『絵入朝野新聞』と、その小説「此処やかしこ」である。

## 二 『絵入朝野新聞』と「此処やかしこ」

「此処やかしこ」は『絵入朝野新聞』に明治二〇年三月二五日から五月一日まで掲載され、第二篇の第七回で途切れた未完の小説である。まずは執筆から途絶までの経緯を逍遙本人への聞き書き<sup>4)</sup>によって確かめてみたい。

逍遙は執筆の経緯について「自分が『書生氣質』を発表して幾分世間的に虚名を得た後、かねて絵入朝野へ転じてゐた前田君（引用者注―前田香雪）から、自分の新聞へも何か小説を書いてくれと頼まれて、前々からの関係上断はりきれずに書いた、それがこの「此処やかしこ」です」と回想している。そして「絵入朝野では、新聞の方から頼んだせるもあつたかつて、大に自分を優遇してくれ、その頃で月額五十円の稿料を先払ひで渡してくれたものだ。これは当時としては異例であつたので、自分も最初はその点は満足してゐた。しかし、この小説について嗟哉の屋お室が提灯記事を書き、その後、別の折に饗庭堂村と香雪と逍遙が談話をしていた際に、最近は「乾兒（こぼれ）に投書な

んぞさせて」売り込みに来る作家がいるという香雪の一言を耳にして「これを聞いた自分の頭には、何かしらんひどく不愉快な印象がムラムラと湧いて来て、もうあとを書く気がなくなつた。それで早速前田君を訪ね、丁度脳充血気味で弱つてゐたころなのだから、それを理由にして（略）早々と切り上げてしまつた」というのがその顛末であるとされる。

その後、この小説は埋もれていたが、柳田泉氏が所蔵していた稀観雑誌『新聞小説／うでくらべ』（萬歳社）に転載されていた本文を読んだ山本正秀氏が言文一致体の早い段階の試みを指摘して以来一躍注目された<sup>⑤</sup>。ただし作品の評価となると決して高いとは言えず、少年の立身出世譚という認識で概ね一致し、他には執筆時期から小説の腹案に二葉亭四迷の『浮雲』の影響を指摘する稲垣達郎氏<sup>⑥</sup>や、作品全体に見られる諧謔性と内容の緊密な関係を指摘する和田繁二郎氏<sup>⑦</sup>があり、途絶の理由についてはノベルの可能性を信じつつも「事実主義・実体主義」を信条としながらその中途半端性のために「静的な現実観からは、深く新しい小説世界は容易に生み出されるものではなかった」とする畑有三氏<sup>⑧</sup>、また「観察の力」を必要とした伝記的な小説を試みたが「偶然でありすぎる事件を主人公賛平の立身出世の契機としなければならなかった」ことから挫折したという青木稔弥氏の考察がある<sup>⑨</sup>。

右の諸説の重要性を認めたくえて本稿は「此処やかしこ」が新聞メディアに掲載された小説であるという地点にまで立ち戻り、小説の構成や表現方法をこの観点から捉え直すことによつて作品の再評価を試みたい。本来この小説は「人情世態小説」の評判の高まりと、読み物の多様化を求めていた新聞メディアの要求が合致して実現したものだ。このことは三月一〇日の社告に「書生氣質に書生の肚裏を穿ち妹背かゞみに才子佳人の深情を写し微を聞き幽を探りて竟に小説流行の端を開きは誰と加する」と宣伝されていることから確かめられよう。そして、あまり言及されることはないが「此処やかしこ」はかなりの人氣作であったという指摘もある<sup>⑩</sup>。

新聞に掲載される読み物は多様な読者層を相手にするために、敷居の高い芸術小説には不向きとされる。このなかで逍遙の「此処やかしこ」は新聞の小説としてどのような身振りを見せ（られ）たのか。まずは「口上」を起点に本文を読み解いていく。

### 三 新聞の小説としての「此処やかしこ」

(1) 「口上」について——執筆方針と読者への配慮

先の社告から約二週間を経た三月二五日、逍遙による「口上」が紙面に掲げられる。最初に「口上」に注目するのは、こ

ここに逍遙の小説の理念が垣間見られることと、小説の方針が示されるからである。すなわち「総じて世の中の物事といふものは傍から見ると当人が見るとはウツテンバツテンの相違があるもの」であるから「妄に従来の作者衆の如く何も怨のない人物に向て「件の奸佞なる曲者とか又は卑劣なる小人」とか草紙の地の文にて罵るのは非理」であり、「故に私は此辺を思ひて始終地の文では人を譏らず成るべく保庇ふやうに批評する心得」であるというものだ。

まず押さえておくべきは、「ジツと当人の心を察して」という表現もあるように逍遙がこの小説を自らが標榜する「傍観」つまり客観描写で書くと述べている点だ。これは「敢ておのれの意匠をもて善悪邪正の情感をば作設しやうせつぐることをばなさず只傍観してありのまゝに摸写する心得にてあるべきなり」という『小説神髓』<sup>11</sup>の主張を引き継いだものである。そして旧来の道義的な「作者」による語りの代行として「人を譏らず成るべく保庇ふ」という異色な語りの設定が行われる。この設定は先行研究で「地の文によって作中人物を描き出す方法に大きな疑念を抱いて」いた逍遙の新たな試みだったが「小説世界に根本的な改変を起こすことはできなかった」<sup>12</sup>や、この捻った語りに伴って生じる揶揄的な姿勢が「逆に語り手の通俗性を際立たせてしまう」<sup>13</sup>と評価されてきた部分である。

ではここで「口上」に見られるもう一つの要点に注目してみたい。

されば読なれぬ婦人がた又は童女こどもたちは思ひ誤りをかしう取違へる事があるもしれず万一さうあつては大変ゆゑ一寸お心得の目安までに一言断つて置きますのサこゝらがソレ謹慎けんびん深い証拠で長口上は御体屈ごたいくついよ〜お話のはじまり〜

(春のや主人「口上」『絵入朝野新聞』明治二〇年三月二五日)

実はこの声明は小説を読み慣れていない新聞の購読者に対する注意喚起にもなっているのである。「夫れ将来の小説は従來の小説とはおなじからず婦女童幼に媚ぶるよりはむしろ具眼者に訴ふるを其本分ともなす」(脚色の法則)、「西洋にても東洋にても小説を玩具もてあそぶのやうにこゝろえまだ嫩若き童男童女に与へて読ましむる風慣なれありこはいと危険なる習慣なれといふべし」(小説の裨益)と逍遙は『小説神髓』で述べてきた<sup>14</sup>。しかし新聞には様々な読者がいる。逍遙は人物の善悪邪正が定まった「続き物」に親しんだ『絵入朝野新聞』の読者の一部<sup>15</sup>が「誤読」<sup>16</sup>することを懸念し、その対策として「異質な語り手」<sup>16</sup>を用意したと考えられる。つまりこれは人物を客観的に描き出す一方で、未熟な読者が「思ひ誤」らないように間接的に矯め

るために工夫された措置と理解できる<sup>17)</sup>。

以上を整理すると、逍遙の回想とは裏腹に「此処やかしこ」は新聞の期待に応えた人情世態小説であると同時に、一部の具眼者よりも幅広い新聞読者に向けて提供するという二つの要件を備えた、かなり意欲的な小説として開始されようとしていることがわかる。そしてこれは物語世界の構えの大きさにも反映している。続いては小説の全体的な構成に目を向けながら新聞の小説としての「此処やかしこ」について検討を進めてみたい。

## (2) 全体的構成と主人公の造形——物語の設定と典拠

ここから「此処やかしこ」の全体的構成（及びその典拠）を検討し、この小説の特徴を新聞メディアにおける連載という観点と絡めながら議論を進めていく。はじめに本作の梗概を先行研究から引用する。

第一編は贊平<sup>おやへい</sup>母子が東京で父の死に遭つたので、仕方なく故郷なる西の都会へ尋ねて行き、兄の佐手島夫婦の厄介になつてゐる。兄夫婦は元より快く置いたのではないので、贊平兄妹と母お鎌とは情ない日を送つてゐる。佐手島の長男は東京に学塾を開いてゐたので、帰省した時、贊平は共に東京して、学塾の手伝ひをすることゝなる。第二編は贊平上京後の

ことで、贊平は骨身を惜しまず働くが、長男が懶惰のためにうまく行かない。その間に母の大病は報せてくるし、気がでなかつたが、樫浦某といふ軍人が贊平の身の上を哀れみ、学才のあることを知り、引取つて書生にしてくれる。贊平はこれに感激して、一層勉強しはじめる。といふ所まで中絶してゐる。（河竹繁俊・柳田泉「文学革新（二）」『坪内逍遙』富山房、一九三九年五月）

すでに確認したようにこの小説は少年富吉贊平の立身出世譚である。物語の結末は書かれずに終わったが人生における「成功」が待ち受けていることは想像でき、本文には贊平の長い人生を前提とした記述（「後に贊平は生長るに随ひ百哀歡を経たりしかど終に死するまでも此夜の別離<sup>わかれ</sup>を忘れ果ること能はざりしとかや」第一篇第七回、四月一六日）も見られる。どこで物語に終止符を打つかにもよるが、かなり長期間の連載に耐えられる設定となっている。

次に物語の輪郭に目を向けてみる。逍遙は先の回想で「この少年を主人公にしたのは、いはゞ自分が当時愛読してゐた Dickens の影響だともいへる」とし、なかでも『オリバー・ツイスト』と『ニコラス・ニクルビー』を挙げ、「此処やかしこ」の学塾は後者の私塾をモデルにしたのだと述べている。ところ

が実際は『オリバー・ツイスト』よりも『ニコラス・ニクルビー』に、そして後者の学塾(Dottheboys Hallの一件)のみならず、小説の根幹からその着想を得ていることがわかる。

「此処やかしこ」は父富吉儀雄の免職と家の類焼のために家計が破綻し、それを気に病んだ父の死去によって残された妻子(妻と兄妹)が、儀雄の兄の佐手島儀正を頼るところから始まる。そしてこの発端は唆されて手を染めた投機で家計が破綻したニクルビーがそのために気を病み病死し、残された妻と兄妹がロンドンで投機的な事業で金儲けをしている亡夫の兄ラルフを頼って上京する『ニコラス・ニクルビー』の発端と全く同じである。息子ニコラスの成長物語でもあるディケンズの小説と「此処やかしこ」はその特徴も多く重なり、両者を比較することとで逍遙の狙いを明らかとすることができる。

では主人公の造形について検討しよう。ニコラスは学業を修めたばかりの一九歳の青年、一方の贊平は一六歳で、東京の私塾に通っていたが父の免職を機に退学し、学歴による出世のコースから脱落する。伯父ラルフの縁故で助教師の職に就くニコラスに対して贊平は未熟な少年であり、彼は努力と忍耐によって大成し、母と妹を養にしたいという意志に支えられている。つまり贊平は「作者主トシテ、少年ノ人ニ、自ら勤テ当然ノ志業ヲ做シ、勤勞ヲ惜マズ、辛苦ヲ厭ハズ、(略)ツヒニソノ志

業ヲ成就」することの観念を謳った『西国立志篇』(須原屋茂兵衛、明治三〜四年)の精神を純粹に体现した少年なのである。

ここで重要なのは、立身出世を信じて困難に立ち向かう贊平が物語のなかで終始この観念に則って行動するという点だ。

彼の行動には忍耐と努力のみがあり、変化も逸脱もない。贊平は同時代の観念(立身出世思想)を具象化した少年であってそれ以上ではないのである。ここに「此処やかしこ」の新聞の小説としての仕掛けがある。このように観念的に単純化された主人公は、善悪が明確に分かれた人物の登場する読み物に慣れた新聞の読者にとって「当世風だがどこか馴染みのある」人物として映るのである。「此処やかしこ」において主人公の少年贊平は新しく古い、善人の主人公の徳義が明治の観念に代わった(だけの)、読者が安心して共感できる人物として造形されており、これが物語の世界に持続的な安定感を与える<sup>18)</sup>。

そして同時にこの主人公に読者の同情が向くような抒情的な場面を入れ、佳局を作ることも怠らない。その典型的な例が第一篇の末尾に近い妹との別離の場面である。

「略」そむな事をいッちやア僕ア否だ僕だッて……折角思ひ切て奮発して……ものを僕だッて悲しいや、僕だッて……(贊平も覚えず萎れ返ッて涙を右の手で押拭ひながら)

「ヤ／＼大変だ傘をおかし酷く降て来た家へ往ふ」大黒傘をさしかざしすゝり泣するお継を励まし叔父の家へと帰りゆく  
〔第七回の続〕明治二〇年四月一六日

母と妹を残したまま冠次郎の経営する東京の私塾へ学僕として働きに行くことになった賛平が、その前日に妹と別離を悲しみあう愁嘆の場面である。立身を志す少年の物語に、このような抒情の高ぶりを織り交ぜながら見せ場を作り、読者の感情を手繰り寄せる。「大衆性」という言葉でこの時期の小説を表するのはふさわしくないかもしれないが、まさにこの二つの要素の程よい安排が「此処やかしこ」の主軸をなす。

### (3) 客観的描写と「異質な語り手」——人物の描写と批評

賛平の立身出世譚は次々と彼に訪れる苦難を幅広い階層の読者に注目させ、小説を継続して読ませる仕掛けにはなるだろうが、「口上」にあった小説の狙いは恐らくそこにはない。逍遥の試みは賛平を取り巻く人物達を様々な角度から細かく、時に対照的に描くことに向けられる。分かりやすい例を挙げれば小説には富吉家、佐手島家、櫻浦家と三つの家族が登場するが、いずれも夫妻兄妹という家族構成で揃えられている<sup>19</sup>。本文を通して各家族の構成員が比較されていく様子を見てみよう。

### (3) — ① 対照される場面と人物

第一篇の第一回と第二回は富吉家の母子が身寄りを求めて佐手島宅を訪れる内容であるが、この場面が両家それぞれの文脈から、回を分けて描かれる。

イ、エサ親子ともに都合三人どうして三人とも贅沢さうな風体あれを五十日も家に置けば妾はモウ／＼如何なッても存じませむ、お金は地の中から沸ものぢやアなし到底たちゆかぬは知れてゐます

〔第一回の続き〕明治二〇年三月二九日

兎も角も血統の兄さま如何様に人情が薄からふとも今の身の上の苦しさを話さばまむざら知らぬ貌をなさらふ筈もなし夫の申し置きに背くやうで如何やら気が咎めてならぬけれど我身唯一個の為ではなし

〔第二回の続き〕明治二〇年四月一日

片や昔東京へ出奔した弟夫婦の妻子が突然押しかけてきて、家計を酷く圧迫するかもしれないという危機感を抱く勘定高い佐手島の細君を描き、片や身寄りのない子供連れで、親戚とい

う繋がりのみを頼りに受け入れてもらえるかを心配するしとか者のお謙が対照的に描かれる。そして両者を対比するように地の文では「佐手島の細君の此晩の心配と件のお謙女の行末の苦勞と権衡はかりにかけて見たら何方どちであらふか兎に角に其夜はお謙女も眠らず」（第二回の続き）四月一日」と記される。これは先の「口上」にあった世の中の物事は見方によって「ウツテンバツテンの相違」があることを実践した箇所と考えられ、他にも娘であるお樋とお継（第四回）、息子である贊平と冠次郎（第六回）の対比となって描き出される。

### （3）—② 個性的な人物描写

平板な主人公の贊平とは逆に「此処やかしこ」に顕著なのは登場する人物が個性的に描かれることである。第一篇で異彩を放つのは佐手島の細君である。

「よくこそ今日は、はじめまして、先達では折々お手紙で、旦那さまはトウ／＼何ださうでゐらっしゃいます、実にトナダ事で、何でございましたネエ其節宅せまの何もアノ何して早速出掛られる筈でしたがツヒ／＼アノ何で取紛れまして、それにアノ昨日、お出なすつたつて真に折あしく旦那も留主るすでソレニ、妾めかけがアノ何で、何方どちへお出なさる途中かはしらぬが

折角わざ／＼とお奇むなすつたものを、ナゼ留主るすだつてもお上あけまをささないむだ……」（第三回の続き）明治二〇年四月三日）

引用箇所は相手に話す暇さえ与えずひたすらしゃべり続ける細君の様子である。お謙らが何しに来たかは十分承知のうえで空惚けながら自分に都合よく事を運ぼうとする様子がこの口ぶりに表現されている。彼女はしっかり者で儉約家だが、身蟲腹で意地悪な仕打ちも平気でする多面的で捉えにくい人物として描かれる。ところで、先行研究では和田氏が「此処やかしこ」の一部の地の文に『ニコラス・ニクルビー』の影響を指摘しているが<sup>(2)</sup>、この細君の延々の長口舌における語り口においても、ディケンズの小説に登場する個性的で奔放なニクルビー夫人の饒舌な語り口に一脉通じるものが認められる<sup>(3)</sup>。佐手島の細君をはじめとして一癖も二癖もある人物が次々に登場するのが「此処やかしこ」の大きな特色であり、「口上」で逍遙が述べたところの本領でもある。第一篇では佐手島の細君、第二篇では冠次郎を中心に彼の友人で長身の堀村と短身の白井の書生二人組、樫浦の長男で前妻の息子盛雄などが時に過剰ともいえる言動をする野放図な人物として登場する。

(3)―③ 「保庇」う語り手とその効果

そして、これらの人物の放逸なふるまいに対して異質な語り手が登場する。典型的な例として富安一家を追い出すため早急に再婚を促す佐手島の細君の発言に続く本文を引用しよう。

さすがに親戚しむみとて実のある者さ末の末までも思ひやつて忌中しんちゆうに縁付とは有難い忠告、なかなかこれだけの信切な言葉は親戚のお袋さへ得云はぬことなり

〔第三回の続き〕明治二〇年四月三日)

地の文の語り手は細君の発言を親切で中身のある助言だと表面上は誉めつつ、常識を弁えない自分勝手な発言を間接的に批判している。もちろんこの皮肉な批評が「ある態度を表していること自体に変わりはない」という指摘は正しい。しかし、すでに述べたようにこの語り手の働きがあるからこそ先のような臆面のない人物の描写を行えることも間違いないのだ。この働きを利用した逍遥の狙いは、例えば同紙の別の読み物にある「勘十郎は性質善からぬ者にて七八歳の頃より悪事を覚え」や「性質佞豎べいじゆうにてよく人の非を挙ぐれど我が悪しきを悟らず」<sup>(22)</sup>とは異なった人物の描き方を見せることにあるので、一面的に人物を捉えることなく、しかしその人物の行動を真に受けない

ように人物を批評する位置を確保するために仕組んだのが、このひねりを利かせた語りの態度である。ただしこの試みは必ずしも万能ではないことも同時に指摘しておきたい。

真心厚き細君が日比ひびの信切しんせつを無にした仕打と何か正当な理由あつて向ふから見れば尤もな腹立例の幕なしの大演説意表に出た千変万化前かと思へば後言沢山今の小言ぞと恐れ入つてゐれば過去ツた事を根に持って欺思ひがけもなき議論の條々

傍はたで内幕の様子を知らずに此場の様子のみを見たときにはまるきり鎌女かまめが脱落だつらくのやうなれど訳を聞いて見れば無理のない話し

〔第五回の統〕明治二〇年四月九日)

先の「口上」に「人を譏らず成るべく保庇ふ」とあったように、この語り手が働きかけるのは原則的に「譏る」側である。しかしここでは佐手島の家族を「保庇」ひつつ、その直後で富安の一家も「保庇」っている。ここで語り手が「傍で内幕の様子を知らずに此場の様子のみを見たときには」とあることに注意したい。初めの引用はこの回の冒頭だが、紙面での場面だけを讀んだ時、この小説の背景を理解していない読者にはどち

らの落ち度なのか一向に事態が飲み込めなくなる。後者の批評は「内幕の様子」（物語の背景）を共有していない読者が、この回の冒頭の描写と「保庇」う語り手の評価だけを読んで早のみこみをすることを恐れ、解釈の再修正となるべき批評を加えている箇所である。

「異質な語り手」の態度は、忌中に再婚を促す等の非常識な言動には即座に効果を表す。しかし小説のなかの諷刺はある程度の文脈の共有が前提となる。必ずしも毎日読まれるとは限らない新聞の読み物の場合、文脈が共有できなければ諷刺が逆に「思はぬ罪を作る」場合もある。本作において諷刺の批評の多くは効果的に機能し、客観描写とともに「此処やかしこ」を成立させるための車の両輪として働いているが、先の箇所からはこの語り手の態度が「誤読」へと足を滑らせかねない要素もはらんでいることを示している。

#### （４）新聞メディアの小説としての「此処やかしこ」

ここまでの考察を踏まえながら新聞メディアの小説として「此処やかしこ」を捉え直してみたい。この小説は逍遙が『絵入朝野新聞』の期待に応え、人情世態小説を新聞の幅広い読者に提供することを意識して書かれている。そして人情世態小説と新聞読者のギャップを埋めるべく、物語の中心に努力する少

年贊平の立身出世譚を置いて読者の興味を繋ぎながら、贊平が苦難のなかで出会う様々な人間の行動や性情を写實的に描き込んでいく。そして放逸で自分勝手な言動を平気で行う個性的な人物に読者が「思ひ誤り」を生じないように異色の語り手を用意し、婉曲的に人物把握の方向性を示すという働きを担わせた。この三つの要素によって成り立つ本作は「作者」による物語世界への介入を避けようと模索していた逍遙の理想ではなかったかもしれないが、「小児に良薬を飲ましめむとする折なりせばまづ甘味なる菓子を与へて小児の心を誘ひつゝ彼漸く渴を覚えて飲を求むるときにいたりてしかして煎薬を飲ましむる」という発想<sup>23</sup>を連想させるような、人情世態小説に慣れない新聞購読者に提供する作品としてはよく練られた書き方となっていると指摘できる。

そして「此処やかしこ」が、月刊の分冊形式で出版された『ニコラス・ニクルビー』に着想を得、実際のディケンズの小説が大部の作品として完結したように、「此処やかしこ」も長期的な連載を可能にする要素を十分に備えていた。ディケンズの作品に倣って物語の緊密な構成にはさほど頓着せず、連載の形態に委ねながら贊平を明治の様々な社会の荒波に揉ませつつ、多様な階層の人物を続々と登場させて活き活きと描くことができたはずである。まさにこれが新聞メディアの小説としての

「此処やかしこ」が持っていたポテンシャルである<sup>24)</sup>。

かなりの長期連載を可能にする物語の枠組みを持ち、ゆるやかに成長させつつ、次から次へと様々な人物を登場させられるという諸条件を揃えながら、なぜこの小説は途切れてしまったのか。前田香雪の一言によって投げ出した旨は逍遥自身が述べているが物語の内部にその原因を求めることはできないだろう。これについても考察してみたい。

#### 四 「此処やかしこ」断絶の理由

##### ——心理的リアリズムへの分岐

「此処やかしこ」第二篇の舞台は東京である。母妹と別れた賛平は冠次郎と上京し私塾の学僕として働く。第一回では樫浦家という新たな家族が登場し、令嬢美代子の宅稽古（家庭教師）について二つの文脈（家庭側と教師側）から描き分けられる。これは第一篇の発端とほぼ同様の展開と考えてよいだろう。

ただし異なるのは、第二篇ではこの宅稽古をきっかけに生じた男女の恋愛譚、より正確には冠次郎の恋情に焦点が当てられる。冠次郎は母親の入れ知恵によって賛平に私塾の学僕と小使、会計と幹事の仕事を任せて人件費を抑えながら経営をする一方で、樫浦家へ宅稽古に行く。そして彼の様子が次のように描か

れる。

模糊たる部屋の中に模糊として坐り且つしほたれ且つへこたれ快々<sup>うむむ</sup>して溜息つき徒然<sup>つくねむ</sup>として考へる、已にして恍惚<sup>ぼわやう</sup>、やゝあつて悄然<sup>しんぜん</sup>、やがて一変してグンニヤリ乎となる（略）これは変だ、豈夫<sup>よもや</sup>と思へども思案の外、こればツかりは貌だちには因らぬ、万一人並に其貌でも、エ、デはない歎、恋ではない歎、もしや風流事<sup>いきなごころ</sup>があるのではない歎、エ、さうだ、恋わづらひだ

（第二回の続き）四月二三日

冠次郎が自室で煩悶する有様を、いくつもの韻を踏みながら描き出し、それが恋煩いであることが説明される。

「夫れ小説は人情を主となす。人情は愛に於て最も切なり」<sup>25)</sup>とは『妹と背かゞみ』のはしがきで述べた逍遥の言葉だが、「此処やかしこ」は第二篇において、人情世態小説のもう一つの面を見せる。第一篇では、登場する様々な人物の性情や言動を客観的に写し出すことが中心だったものが、第二篇では冠次郎の恋情から生じる心理的煩悶に焦点が当てられる。そして第一篇と手法を変えて樫浦家の令嬢の側からの内面が描かれないことで、恋の行方は先延ばしにされ、冠次郎の恋情とそこから派生した煩悶が一方的に深められていく。

しかしその一方で物語の中心は、塾長冠次郎の恋の煩悶によって次第に経営が傾く私塾で働く贊平が、雑役を押し付けられながら冠次郎の代わりに奔走する様子が描かれる。つまり立身出世を信じて困難に立ち向かう贊平の物語に、冠次郎の苦悩の物語が派生し、恋愛の行方が定まらないまま彼の煩悶だけが深まっていくために、物語が二つに分岐してしまっているのである。

作品の性質は全く異なるものの、これと似た分岐と変化を見せる逍遙の小説がある。この翌年に『読売新聞』に掲載される『小説／外務大臣』（『読売新聞』明治二十一年四月五日〜六月二十九日）である。煌びやかな欧化主義を背景に、明治二十一年頃の政治の権力闘争や駆け引きを描いた『外務大臣』は「逍遙が文学革新の意欲的な姿勢をもち続けていた〈第一期〉の、最終時点で手がけられた作品」<sup>26</sup>と位置づけられる。そして清水茂氏が「多くの人物をつぎつぎと登場せしめながら、それらの各群を説明や概括によらずなるべく描写的に浮彫していつて、（略）おのずから長編小説としての結構をまとめ上げようとした、かなりスケールの大きい、野心的な意図に基いている」<sup>27</sup>と指摘するようには、少年の立身出世譚と政局小説と性質は異なるが、全体的構成の面でこの二作は共通性を持つ。しかし『外務大臣』は、政治の内幕を巡る思惑と政略の群像劇として書き始め

られたにも関わらず、物語が次々に分裂し、最も政治色の薄い長後久男の劣等感に派生する内面的な苦悩の物語が前面にせり出し、才東機四郎に対する長後の妹皆子の恋の物語が派生し、政府を顛覆させようとする壮士達の物語も並行する。語り手は「名を知らぬ紳士が堤にたつて壮士の鬨を窺ひつゝある間に脚色を覗き機関のやうに拵へた作者の不祥いそがしくかけ戻つて外の舞台の道具だて我身ながらお笑止や」（第二六回）とあちこち駆けまわった挙げ句、その後の大要を簡単に祖述して閉じてしまう。そしてこの変化と中途での断絶は、「野心的な群像小説的 성격と心理描写の両立はたやすいことではなく、均衡を失することで、逍遙の創作意欲が減退したとしてもさほど不思議なことではない」と指摘される<sup>28</sup>。

この時期の逍遙は「全局小説」や「極美小説」の理想を抱きながらも、それが具体的な作品として結実せず、次第に作品は限定された時間、空間のなかでの心理劇へと変わっていく。スケールの大きい『外務大臣』も才東と皆子に「ヨキヒト」<sup>29</sup>としての性格が与えられるはずが、嫉妬し苦悩する長後の「心理主義リアリズム小説」の方向へと進んで行ってしまふ。これがある特定の人物の内面劇を絞り込んで描く『松のうち』<sup>30</sup>や「細君」（『国民之友』第三七号、明治二十二年一月）へと向かっていくことは周知の通りである。

贊平を安定した主人公とし、第一篇で人間の性情を様々な角度から描きえた「此処やかしこ」も第二篇の変化に伴い、逍遙自身のなかで解決できていなかった群像劇と心理劇の調和に伴う困難の間隙に陥ってしまったと考えられる。さらに本作で注意すべきは、内面が深められていく変化が訪れたのは贊平ではなく冠次郎だったということだ。おそらく贊平にこの契機が訪れなかったのは、第二篇の目論見である恋の煩悶を描くにあたり、少年であった贊平の年齢や、立身出世のために苦難に耐える主人公としての設定がこれらの変化を阻害したと考えられる。新聞の読者を繋ぐ安定した主人公に訪れる大きな変化は、読者と作品の紐帯を切断しかねない。

しかし逍遙が理想とした「極美小説」を見据えたとき、主人公の行為によって「暗に世を諷し俗をそしる」ことのできる「ヨキヒト」たる主人公の資格はむしろ贊平こそあったのではないか。贊平の観念的な言動を人間的な深みのある青年へ蟬脱させることによってこそ、贊平は逍遙の言う「ヨキヒト」になりえたのではないか。しかし、その可能性は閉ざされたまま変化はついに訪れない。その結果として物語は一途に耐えて努力する素朴な贊平と煩悶する冠次郎の物語に分岐したまま、投げ出されてしまっているのである。

## 五 新聞の小説としての「此処やかしこ」は 読者に何を伝えたか——結びにかえて

以上本稿は坪内逍遙の「此処やかしこ」について、新聞メディアの小説という観点に立ち、その「口上」を手がかりにしながら全体構成やその特徴的な試み、途絶の理由にまで幅を広げて考察してきた。明治二〇年代初頭に新聞が読み物の多様化を図るなかで、逍遙の人情世態小説は、小新聞の読者層を中心とした『絵入朝野新聞』の購読者に向けてどのように届けられたのか。すでに見てきたように逍遙は物語の中心に読者が寄り添いやすい少年の立身出世譚を据え、安定した物語世界を確立したうえで、場面ごとに登場する様々な人間の様態や恋情を描く小説を試みた。この試みは新聞の小説として読者をつなぎとめる要素を持つと同時に、物語の進展に合わせて多様な人物が登場し、一面的には捉えられない人間の諸相を表現したものとしては成功したが、恋情による個人の煩悶を描く第二篇での変化によって、逍遙自身が直面していた隘路に陥ってしまう。そのような可能性と限界を伴った小説と言えよう。

では果してこの試みは当時の購読者にどう受け止められたのか。「此処やかしこ」の同時代評<sup>①</sup>と言えは小説の掲載中に逍遙が応答した眞貞目道人<sup>②</sup>のものが言及されることが多いが、当

時の一般的な読者の反応はどうだったのか。

或ひは朝野新聞とも思ふし、改進黨新聞かとも思ふんだが、「こゝ、やかしこ。」と仮名の題で、それがネ、大分文章の体裁が変つて、あたらしい書方なんです。中に一人お嬢さんが居るんだネ、其のお嬢さんに、イヤな奴が惚れて居て口説くんだネ。(何かヒソ／＼いふ、顔を赤くする、又何かいふ、黙つて横を向く、進んで何かいはうとする、女はフイと立つ。)と先づ恚うです。おもしろいぢやありませんか。演劇しばいなら両手をひろげて追まはす。続物の文章ならコレおむすとしなだれかゝる、と大抵相場のきまつて居た処でせう。

(泉鏡花「いろ扱ひ」『新小説』第六年一卷、明治三四年一月)

金沢で少年時代を過ごしていた鏡花が感心しているのは第二篇の第二回に掲載された、冠次郎が恋愛感情を抱いていた檜浦の娘美代子に言い寄る場面である。

冠つご次君は段々傍へ寄ツてしばらく言兼たが何事か言ふ、令嬢は笑ツてゐる、又何か言ふ、黙ツてゐる、又何か言ふ、顔を赤くする、冠次君は摺寄ツて手を握る、令嬢はたちまち戦慄かろえあがつた、臂で振払ツて立上ツた、直すにブイとたつて次

の間へ去た、冠次郎君は後にロアンゴリ、遙に向の間で「駒や／＼」  
(第二篇「第二回の統」四月二四日)

言い寄る冠次郎と言い寄られる美代子の様子が少し距離を置いた位置から細かく描かれる。会話の音が聞こえないことで読者の注意は自然と二人の動作に向く仕掛けた。集中した緊張の高まりが急に破れ、美代子が猫を呼ぶ声によって現実が戻ってくる。この恋愛模様の描き方は、哀切な兄妹の別れに折よく天気が崩れるという場面とは全く異質なものだ。

小説としては長編に発展する物語の規模を持ちながら、序盤で投げ出された未完成品である「此処やかしこ」は、読みようによっては単純な物語と、多くの欠陥を持つ小説である。物語内世界の分裂によって短い期間の掲載で終わったが、この作品で逍遙が試みたことを措いて評価することは、不当にこの作品を貶めてしまうことになるだろう。新聞読者に拓かれた人情世態小説として新しい小説の手触りを未知の新聞読者に伝えることは確かに成功しているのだ。

逍遙の人情世態小説が移り行く過程において、新聞の読者に真摯に向き合った小説としての位置づけを確認し、摺筆としたい。

- (1) 山本武利「明治前期の新聞読者層」『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局、一九八一年六月。
- (2) 以下の動勢は「小新聞の台頭」（日本新聞販売協会編『新聞販売百年史』日本新聞販売協会、昭和四四年五月）、小野秀雄「新聞紙改造の時代」（『日本新聞発達史』大阪毎日新聞社、大正一年八月）等を参照した。
- (3) 高木健夫「大新聞の大衆化」『新聞小説史明治篇』国書刊行会、昭和四九年一月。
- (4) 柳田泉「此処やかしこ」そのほか『随筆明治文学』春秋社、昭和一年八月。
- (5) 山本正秀「言文一致体小説の創始者に就いて」『国語と国文学』第一〇巻九号、昭和八年九月。
- (6) 稲垣達郎「言文一致への途（その一）」『近代日本文学の風貌』未來社、一九五七年九月。
- (7) 和田繁二郎「坪内逍遙 七『此処やかしこ』」『近代文学創成期の研究』桜楓社、昭和四八年一月。
- (8) 畑有三「坪内逍遙のノベル——『此処やかしこ』の位相——」吉田精一博士古稀記念論集刊行会編『日本の近代文学——作家と作品』一九七八年一月。
- (9) 青木稔弥「泰西女丈夫伝」と坪内逍遙『国語国文』第五〇巻五号、昭和五六年五月。
- (10) 前掲柳田泉を参照。
- (11) 「小説の主眼」『小説神髓』上巻、松月堂、明治一八年九月。
- (12) 宇佐美毅「小説表現の模索」『小説表現としての近代』おうふう、二〇〇四年二月。
- (13) 山田俊治「三遊亭円朝の流通——傍聴筆記の受容と言文一致小説——」『日本文学』第六一巻一—二号、二〇〇一年一月。
- (14) 「小説脚色の法則」は下巻（明治一九年四月）、『小説の裨益』は上巻（前掲）にそれぞれ所収。
- (15) 「大新聞」の庶民版は「大新聞」を取っている家庭の妻子、リテラシーの低い庶民層へ浸透していたことが山本武利氏の前掲書（同章）に指摘されている。また林原純生「近代文学とへつぎ物」——『絵入朝野新聞』からの問題提起——（『日本文学』第四二巻四号、一九九三年四月）では明治一〇年代後半の改良主義と「続き物」の関係を編集方針と新聞の読者の受容のずれに言及しながら考察している。
- (16) 前掲山田論文による。
- (17) この新聞読者への配慮から連想されるのは、逍遙がこの後に発表する「新聞紙の小説」『読売新聞』明治三十一年一月一七（一八日）との関連である。逍遙はそこでも「賢愚老少男女を問はず皆新聞紙を読む」ので、「益せんとして害を蒙らし思はぬ罪を作ことあらん」と読者層の厚さに伴う受け止められ方の
- (18) 多様性に言及している。本節における新聞メディアと小説に関する分析については佐野金之助「新聞小説の方法」『文学界』第九巻五号、昭和三〇年五月）から多くを学んでいる。
- (19) この家族構成も『ニコラス・ニクルビー』からの借用であろう。ニコラスの家族、勤め先のスクエアズ校長の家族も同様である。ただし「此処やかしこ」のように家族が直接比較される場面はない。
- (20) 前掲和田繁二郎を参照。
- (21) ニクルビー夫人の長口舌は全編にわたって見られるが、物語の前半では第二章に顕著である。
- (22) 夢遊居士「名譽の亀鑑」『絵入朝野新聞』明治二〇年一月三日（三〇日）。引用は前者が第二章、後者が第五回からのもの。
- (23) 「小説の裨益」『小説神髓』上巻、前掲。
- (24) これは発表媒体やその状況を勘案したうえでの評価であり、小説そのものの評価には結びつかない。作品自体を評価するなら、特徴や欠点も含めて主人公は「単純な性質のみが顕著であり、作中に登場するさまざまな状況や問題に容易に適應することができるのだ。読者を引っ張るのは、念入りに構成されたプロットではなく、人物や事件の描写、会話などに見られるディケンズの文章の生命力である。」（甲斐清高『ニコラス・ニクルビー』

『ディケンズ鑑賞大事典』南雲堂、二〇〇七年五月）と類似したものになるだろう。

(25) 「はしがき」『新磨妹と背かゞみ』会心書屋、明治一八年一二月。

(26) 畑有三「転換期の坪内逍遙——『外務大臣』の位置」(『国文学 解釈と教材の研究』第一七卷三号、昭和四七年三月)。

(27) 清水茂『小説／外務大臣』論『早稲田大学

高等学院研究年誌』第七号、昭和三七年一月。

(28) 青木稔弥『小説／外務大臣』とその可能性『国語国文』第四七卷一、二号、昭和五三年一二月。

(29) 「極美小説の事につきて」『社会之顕象』第一卷一号、明治二二年四月。

(30) 「忘年会」(『読売新聞』明治二〇年一二月二

八(三〇日)、「松のうち」(『同』明治二二年一月五日(二月八日))、のち二編を『松のうち』(駿々堂、明治二二年八月)として出版。

(31) 「学術上より春の屋主人を罵る」『読売新聞』明治二〇年四月一三日。

\*本文の引用に際し、正字は適宜通行の表記に直し、ルビは一部を除き省略した。